

特集

# 日本でもっとも住みたくなる大村<sup>まち</sup>を目指して

## 人を引きつける魅力がここにある

日本でもっとも住みたくなる街づくりを目指す大村市。  
市外から移り住み、大村の魅力を満喫しながら新しい風  
を吹き込みつつ、いきいき暮らす人たちにお話しをうかが  
いました。  
そこには、永年住み続けている「大村の人」が気づいてい  
ない新たな発見がありました。

### 本物の自然、厳しいが

### それ以上に

### 美しく、優しい



「風の家」

多良山系の麓<sup>ふもと</sup>(東大村1丁目)に、長与町から移り住んで11年目を迎えました。30年間勤めた会社を辞め、お金には代えられないものを求めました。田舎暮らしの傍ら、自分や社会のために「何か」ができればとの強い思いでした。

好きで、たまたま出会った諫早湾の干潟に興味を持ったのが、人生を一変するこ  
とに。さまざまな人との出会いでこれま  
での価値観が大きく変わり、社会の問題  
点を根本から観ることになりました。  
3人の子どもが巣立ったのを契機に、  
妻との新しい人生に希望を託し、田舎暮  
らしで生きていく決心をしました。



山崎寛さん、幸子さん  
長与町から移り住んで11年目

自然の厳しさを知らなかった私たち

まずは場所探し。自然と共生しながらの暮らしが最優先です。大村市内で畑作業ができる広い土地が確保できる場所を見て回りました。この場所にたどり着いたときは、まさに「一目惚れ」でした。畑も確保でき、豊かな自然に囲まれ、大村湾から遠くは雲仙までが一望できます。

家が完成するまでの2年間は、テントを張ってキャンプをしたり、畑を耕したりの日々でした。本当の自然を知らなかった私たちは、多くの試練を受けました。家の名前を「風の家」とつけたとおり、台風が通る度に、畑や温室の屋根や壁が吹き飛ばされてくじけそうでした。自然の美しさと厳しさが背中合わせのこの場所に根を下ろして、初めて私たちは本物の自然を知ったように思います。受け入れてしまえば何とかなることかと今更ながら思いますが、最初の2〜3年は戸惑いの連続でした。

ぼちぼち農園、畑の学校



2004年春から始めた有機無農薬の野菜づくり「ぼちぼち農園畑の学校」は、これまでに6期生約70数人が巣立っていきましました。参加者との絆を大切に、野菜を作ることで「畑から命の循環を体験したい」という思いを形にしたのが畑の学校です。

「土」と触れ合うと普段気がつかないことに気づかせてもらえます。さまざまな体験を通して1年後には別人のような表情になります。大地の力は偉大です。多くの人が抱えるストレスや不安を喜びに変えてくれます。

四季を通して25種類程度の野菜を作ります。種をまき、双葉に目を細め、雨や風、草や虫と格闘する野菜たちを見守る時間は、まるで子育てそのものです。もっとも

もっと私たちの社会や食の問題、環境問題を身近に考える人たちが増えて欲しいと願ってやみません。我家で食べる野菜は全部作ります。自分で作れない物はできるだけ食べないようになっています。季節のビタミン愛たっぷり甘くて安心の元氣野菜を毎日美味しくいただいています。

生ごみリサイクル



市内の小学校3年生の総合学習では、ニンジン作りを畑の学校の有志やアサちゃん農園の皆さんと一緒に手伝いました。学校給食の調理くず(生ごみ)を畑に戻し、その土で黒田五寸ニンジンを作りました。

市の環境保全課が行う「もったいない抽選会」でのボカシ作りや市内の町内会では生ごみリサイクル出前講座などでごみ減量化などの普及にも取り組みました。



ぼちぼち農園 畑の学校

化学物質を使わない暮らし

日常生活では、極力合成化学物質を使わないようにしていますが、何の支障もなく楽しく暮らしています。食事も自分で作った野菜と魚が中心です。添加物の入った食品を避け、国内の産地がはっきりとしたものを使います。

洗濯は石けん洗濯です。すすぎは、風呂の残り湯・雨水で済ませ、洗髪はシャンプーやリンスの代わりに酢を使用します。妻は化粧をしたときだけ石けんを使います。だから1年間に消費する石けんは、台所も風呂場もほぼ1個ですみます。

今、夢中になっていること

妻は、毎月2回、洋裁の先生に来ていただいて友人と洋裁を楽しんでいます。地域の人たちや遠くは吾妻町からも来られて



風の家洋裁学校



います。私たちの年代になると、親の形見の着物や洋服がタンスに眠ったままの人が多く、なんらかの形にして残しておきたいの思いで始めたようです。俗にいうリメイクで、作った作業衣などは、知人にプレゼントして喜んでもらっています。また、日々の様子を短歌に詠んで日記にしています。短歌集は6冊目に入りました。近作を紹介すると

歌ありて 命みつめる日々ありて  
時に溶けゆく われ風となり

私は、時間をみつけては家具作りを楽しんでいます。現在孫が8人いますが、小学校入学時に手作りの学習机と椅子を全員にプレゼントしたいと思っています。今、3台目を製作中ですが、孫たちが、私たちのことを思い出しながら勉強してくれたら嬉しいですね。



椅子を製作する寛さん

自然の中の生活は天国です。春は一斉に木々が芽を吹き、小鳥たちが畑や木々の梢で遊んでいます。夏は山の稜線を通り過ぎる風がひんやりと心地よく、秋は種から育てたモミジが一人前に紅葉して私たちが喜ばせ、冬は暖炉で燃える炎のゆらめきに心癒されます。当たり前のように神々しく昇る朝日に感謝し、美しい夕日に心奪われ一日が終わります。ここでしか体験できない、ぜいたくな暮らしがあります。

# 大村湾に沈む夕陽に魅せられて ここに決めました。



さらだ  
皿田 圭作さん、美和子さん  
東京都から移り住んで16年目

## あのときの一言が現実

ここ松原2丁目の久津地区に東京都から移り住んで16年経ちます。私は舞台装置と舞台照明の仕事をしていますが、まだ若い頃、九州地方を公演で回ったことがありました。ハードスケジュールの連続でかなり疲れていた私の目に、JR大村線の車窓に映る大村の風景が飛び込んできました。「こんな所にいつか住んでみたいな」と口にしたのを今でもはっきり覚えています。そのときは、まさか現実になるとは夢にも思っていなかったのですが。

十数年後、大村湾沿いをバスに乗って通りかかったとき、この場所で売り地の看板が目に入り、のどかさど心癒す夕陽が沈む大村湾の眺望に魅せられて即決しました。

## 今も仕事場は東京です

舞台美術の仕事は、台本を読んでイメージを膨らませ、演出家と打合せを重ねながら制作をすすめています。今でも多いときは月に数回、東京まで打合せに出かけます。遠いようですが、わが家を出て3時間足らずで都心に着きますからとても便利ですね。

妻は、都の職員として保育の仕事、特に0歳児保育に深く関わっていたことから、定年後「NPO法人ブックスタート」事業の設立に取り組み、昨年まで度々東京と大



新作の舞台デザインを制作中の圭作さん

村の往復でした。ご存知のように、この活動はイギリスで生まれ、2000年の「子ども読書年」に日本で紹介されたのを機会に、子育て支援として急速に全国の市区町村に広がっています。

大村市でもいち早く取り入れ、図書館、保健所、こどもセンター、そしてボランティアの人たちが、0歳児健診時に絵本を手渡しています。「赤ちゃんどゆつくり心ふれあうひとときを持てるように」と願っています。

## 大村の人は礼儀正しいですね

移り住んですぐ、ご近所から、息子さんの結婚式やお孫さんの初節句に招待されたりしました。家内がいなくて、一人で近くの飲み屋さんに行こうとしたとき近所に不幸があり、通夜を知らせてくれた向かいのおばさんに「明日の葬儀に出るから」と断ろうとしたら「そりゃいかんばい」と叱られてしまいました。この地域の人は、町内や隣近所の絆を大切に生きているのだなと心に沁みました。

大村人は、風土のせいのか穏やかで、あいさつも丁寧にしていただき、とても礼儀正しいという印象です。大村に移住したときも何ひとつ気構えることが無かったし、自然と地域に溶け込めた感じで感謝しています。

## 交通の利便性が高い大村だから..

ここに移り住んでからも、夫婦そろって東京で仕事やボランティアを続けることができたのは、交通の利便性が高い大村ならではのつくづく思います。

これからも、今まで以上に地域と深く関わりながら、無理なく、ここにしかない魅力を楽しみつつ、ゆつくりと暮らしていこうと思っています。

黒木町に  
移り住んだ人たち

黒木町は萱瀬地区の郡川上流に位置し、昭和20年代後半をピークに製炭業が盛んに行われました。多良山系の登山口やキャンプ場などがあり、夏場は市内外から涼を求める人たちにぎわいます。

山々に囲まれ自然豊かな黒木町に移り住んだ3家族に、宮本さんが暮らす「黒木山荘やまぼうし」にお集まりいただきお話をうかがいました。



写真右から

宮本千波さん

森川直子さん

小林峯子さん

拓雄さん



「黒木山荘やまぼうし」



地元の人を招待してクリスマスコンサート

どうして黒木町で田舎暮らしを

宮本千波さん

長与町から移り住んで6年目

医師をしていた夫と、第2の人生は自然豊かな環境でゆっくり過ごそうと話合っていました。二人とも町育ちで里山的な場所を探していたので黒木に決めました。家が完成する前に夫は亡くなってしまいましたが、夫が好きだったヤマボウシを庭に植樹し、この家も「黒木山荘やまぼうし」と名付けました。

これまで色々な場所で暮らしてきましたが、ここ黒木地区の人たちは、外部から移り住む人を拒むことなく、とても親切に暖かく迎え入れていただきました。私にできる恩返しといえばちよつと大げさですが、ホームコンサートを開いて地区の人に楽しんでいただいたり、多良山系への登山に親しむ人たちの憩いの施設として利用していただいたり、地区の皆さんの集いの場になればと思っています。

森川正弘さん 直子さん

横浜市から移り住んで11年目

横浜市で会社勤めをしていた夫の定年に合わせて、夫のふるさと大村で暮らそう

とっていました。大村市内を探していたのですが、私の父が黒木小学校で教壇に立っていたという縁で、この地にお世話になることにしました。

移り住んで最初は都会暮らしが恋しかったのですが、今はすっかり素朴で豊かな自然と人情味あふれる地域の人たちに支えられ、田舎暮らしをどっぷりと満喫しています。夫と楽しむ日課のウォーキングは、どこまで行っても風薫る緑の中で最高です。

小林拓雄さん 峯子さん

横須賀市から移り住んで10年目

自衛隊の夫と国内21か所で暮らしましたが、定年と同時に2回住んだことのある大村に帰ってきました。出身は二人とも鹿屋市ですが、大村に住んでみたい所でした。

黒木町を選んだのは、野菜づくりやガーデニングができる広い土地が欲しかったからです。山々に囲まれ、きれいな空気を吸いながら、趣味と実益を兼ねて汗をかく毎日にとっても満足しています。

市の生活改善推進員や、町内のお世話もさせていただき、これからは生涯現役を目標に、地域の皆さんとがんばっていきましょうと思っています。

大村に移り住み、豊かな自然、太陽の恵み、土の匂い、ゆっくり流れる時間の中で魅力的な生き方を満喫しながら、大村暮らしを楽しむ人たち。

違った角度・視点から新しい風を吹き込む力は、大村の街づくりの核になる可能性を秘めていることを強く感じました。